

上海・復旦大学での留学経験

外国語学部
中国語学科4年

福家 愛子

◆前言

私は2010年9月から2011年7月まで、神奈川大学が学費生活費ともに援助してくれる派遣交換留学生として、上海の復旦大学に10ヶ月の留学をしました。高校から中国語の学習を行い、なおかつ父も中国で働いている私にとって、中国は初めて訪れる場所ではありません。そのため大きなカルチャーショックというものは有りませんでした。これが、それほど長く滞在したのは初めての経験だったので、長い日々の生活の中や、実際に向こうの大学に所属して初めて少しずつ実感していく異文化を感じました。またそれが向こうで生活していくうちに自然に自分に馴染んでいって、私の中にもともとあった常識や観念といった枠を取り外し、新たな見解を与えてくれたように思います。

この留学の期間、全てが楽しかったわけではあ

りませんし、困難や壁にぶつからなかったわけでもありません。しかし、その日本では味わい得ない苦しみを、一種の糧として今後の将来方針などに役立てていければと考えています。

私が、本稿で述べたいのは、訪れてすぐ誰もが目につくカルチャーショックについてではなく、私自身が日々の生活、学習の中で身にしみて実感した事柄についてです。



復旦大学光華樓
東主・西主・東輔・西輔の四棟
学系のオフィスやホール、一般教室がある。

◆今後の留学生に貢献するために

私自身の実体験に触れる前に、私がどのような心構えを持って留学に参加したのかを記したいと思います。語学力を向上させる、積極的に異文化交流をする、卒業のためにも単位を取得したい。目標はいくらでもありました。しかし、これらは全て自己責任、実現させてもささなくても全て結果は自分に返ってくる事柄です。私は学費及び生活費を自費負担しなくてよいという好条件に選ばれたことへ、何かしらの成果を学校に持ち帰らなくてはなりません。勿論自分自身のために前述した目標は成し遂げるつもりでしたが、それ以外に、自分に求められる公的役割は何だろう、と考え、留学の詳細な情報を持ち帰り、今後留学を志す生徒に伝えることだと思いました。

情報の伝達の大切さは、今回の留学で身にし

みるほど分かっています。留学に行く前の段階で、私は色々なことが不明確なまま現地に着きました。

向こうの大学から送られたビザ申請のための書類に不備があり、1年単位のビザが取得できなかったこと、国際センターを通して宿舍の予約をしてもらったのですが、何処の宿舍を予約したのか、情報の伝達に不備があったために、伝えられていた宿舍には予約が無かったこと、また授業の履修に関してなど、到着や在学手続きが立てこむ最初の数週間は、不安で仕方がありませんでした。国際センターで得られない情報は公式サイトを閲覧したり、ネット上にある留学体験記を参考にしたりしました。しかし、実際に経験した後に書く体験記は、実は不安を抱えている時の心理とは違った視点で書かれます。実際にやってみればあっさり終わった手続きも、その寸前まではあれこれ不安があるのです。それなのに、体験記にはその手順を書き留める程度で終わってしまっていて、実際にその場で状況を見ていない私にしてみれば、中々想像したり心構えを持ったりするのは難しかったです。

この事実を、出立する前、それこそ派遣交換留学生に応募する段階から感じていた私は、1冊のノートに留学に関する不安が浮かぶたびにそれを書き留めていくようにしました。留学が始まっ

てからの体験記ではなく、その準備段階から日記をつけることで、不安な時の視点を忘れずにいられるようにしました。この手帳に書かれていることは、きつと今後留学を志して説明会に参加してくる生徒も不安に感じていることだと思えます。

私の手帳には、まずその疑問が浮かんだ日に、そのままその疑問を記入しています。例えば、ビザの申請書類を確認して、そこに手違いを発見したり、疑問を抱いたりしたら、日付と共にそれをノートに記入しておく。「ビザの申請書類の期間が間違っているかもしれない。申請するのはXビザか、それともFビザか。Fビザだとしたら向こうで変更を行えということか。明日、国際センター担当者に聞きに行く」こう書かれたノートを持って、翌日国際センターを訪れ、そこで受けた説明を、次の日の日付で書いていく。そして実際現地でその手続きを行った時に、その直前の疑問点と手続きを終えた後にその手順を記載する。

このように一連の流れを記録に残しておけば、今後の留学生へアドバイスする際、明確に行うことが出来ます。また、こうすることで得られるのは今後の留学生の為だけのものではなく、自分の中の疑問点の整理、忘れてはならない重要事項の記載、そして一度受けた説明が後日二転三転した時に記録を見せて確認するための証拠として、大

きく役立ちました。

書かれているのは、ビザの手続きや保険代金などの重要なことだけではなく、インターネットの制限や学校近くの銀行が一体どこにあるのか、携帯のプリペイドカード購入場所などといった実際に行ってしまえばすぐに解決するような不安や疑問までそれを思いついた日付ごとに記載されています。

復旦大学行き1人目の留学生として、自分の留学のみならず、今後の留学生の不安を取り除けるような地盤を作りたいと考え、日記なんて3日も続かない私が書き続けました。そしてまた、留学から帰った後のことを不安に感じて躊躇う人のためにも、帰国した後の手続き、帰国後の授業の履修登録、留学先での単位認定についての決まり、記録に残してあります。事前に何度も確認し帰国後の見通しを立てるこ

とで、4年間で卒業できるのだらうか、就職活動に響かないだろうか、といった不安をなくし



留学中用日記と留学準備段階日記
不安・疑問とそれに関する事柄を書く。

て留学に行けるように、との考えでした。

1月にはこれから留学に応募しようとしている人の相談を受けるために日を取り分けるように国際センターから依頼を受けました。

留学に行つて、はいよかった、沢山喋れました、異文化交流しました、というのを悪いとは言いませんが、そこから何かにつなげていくために、資格を取ったりして留学の成果を結ぶのだと思います。私はやろうと思えば一番簡単な、でも過去の自分には切実に求めているけれど得られなかった、今後への貢献という形でまずこの留学の成果を持ち帰りたいと考えました。

◆私生活

私は日本にいてすら未だ親元を離れたことが無く、一人暮らしはおろか、見ず知らずの外国人との共同生活など、高校の頃に経験したホームステイの1週間しかありませんでした。ただでさえ異国語による意思疎通というハンデがあるのですから、色んな事が不安に感じて、最初の1ヶ月は全く気が抜けず張り詰めていました。現地に着いてから判明した宿舎は学校外の留学生向けアパートでした。室内は3LDKあるいは2LDKの寝室は個別の部屋だったので、パーソナリティスペースの広い私としては助かったと思っています。



復旦大学図書館前、国権路。
本や文具、衣類などを路上販売していて、勿論値段交渉可。

用しました。

こういうところは、ぼったくられる可能性もあるけれども、レジやバーコードで管理しない、交渉次第で値段が変わる販売システムはとても中国

らしいと共に、慣れてくれば親しみも感じられて好ましいので、そういった「地摊儿」や市場などはとても活用していました。

後半はこちらに來たばかりの人を案内して上海を巡ることもあり、一通りの観光地を巡り、豫園などはよく日本から來たばかりの留学生を連れて訪れていたの、帰るころにはすっかり顔見知りになり、「朋友」などと呼んでくれて、特別に安く

手続きや応対などに若干の遅れが生じることはあるものの、全体を通して外国人向けのサービスとなっており、以前ヒーターもお湯もないところで1週間を過ごしたことがある私にとっては十分快適空間と言えました。

改修工事のために部屋を移ったりすることもあれば、ネットがしばしば回線断絶、冬はなかなかお湯が出ない、ヒーターが弱い。問題を上げればキリがありません。しかし、このような中国での生活に、日本と同じ水準を求め、それを満たしていなければ悪い環境だとストレスを感じるか、それとも、その状況に可能な限り早く適応しようとするかは個人差ですが、我慢できない最低ラインを下げておけば大したことはありません。大事なのは、留学で直面する全ての事柄を、良い悪い関係なしに、経験として受け入れようとする姿



同和国際留学生村
復旦大学北区宿舎側門前
周囲をコンビニや食堂が取り囲む。

してくれるというようなこともありました。

留学生仲間で、上海博物館、鲁迅記念館、上海野生動物園、外滩、上海海洋博物館など上海はあまり観光地が多いとは言えませんが、色々な処を訪れ、またその機会がスピーキングのよい場となっていました。

◆異文化理解

不便、とか不潔といったことでカルチャーショックを受けることはありませんでしたがやはり人付き合いの中では相手の常識と自分の常識が違ふことでストレスを感じたりすることはありました。それに対して、私はその人の主張する常識をその人の母国全体を判断する物差しにはしないように心がけ、「これだから」や「やはり」などとこれ以上その国の文化を知ること諦めるような考え方はしない、という考えを日々の生活の中で自然と身につけました。

国籍も言語も常識も、何もかもが違う人が突然キッチンやふろ場を共用すると、そこに衛生観念の違いや、生活習慣のサイクルでトラブルが生じやすくなります。私がそんな中でトラブルを起こさないために自然と身につけていったのは、自分の常識の枠を寛容させることです。相手の常識を自分の常識と受け入れて、相手に100%合

勢であるか、そうでないかと考えています。

私がどんな短期間であれ、共に過ごしたルームメイトは、韓国・カナダ・日本・フランス・中国・メキシコの人でした。ほとんどが短期間だったためにころころ変わり、中には名前すら知らないまま縁に顔を合わせず去った人もいます。積極的に交流することが出来たフランス、中国の人は、私のスピーキングのよい練習相手となりました。

去年も復旦大学に來たことがあるフランス人には、留学生では到底行かないような路地を抜けたところにある市場も教えてもらいました。あまり中国に馴染めていない留学生と付き合っていると、カルフルやウォルマートといった大きなスーパーに行く癖がついてしまうのですが、魚の内臓や豚の頭が床に転がっているような市場でも私は気にせずに入りました。

スーパーなどではなく、路上販売している文具や衣類や本、時には海賊版などのDVDなどを購入するのは、保証とかの面では色々心配な点がありますが、本ならテレビの中などでしか見られない貴重な光景として、またそういった場所での観光客向け土産店とはまた違った値切り交渉などもよい経験として積むことを目的に積極的に活

わせることではありません。例えば、ゴミの始末が自分の部屋から放り出すだけの人と生活するとしたら、自分の周りは綺麗に保ち、そして相手の部分も綺麗にできる部分は自分が綺麗にしようということ。普段それを氣にとめない人に掃除をしてなどと口やかましく言えば、不和が生じかねません。勝手に綺麗になるのであったら相手も特に文句はないでしょうから、自分がその分まで動けばいいことです。逆に私より遥かに衛生観念が高くて、台所の水垢1つ許せない人が來たら、自分の観念を変えずとも相手が望む水準に引き上げてやれば問題は起こらないでしょう。

どんな状況でも大丈夫、と言ったように常識や観念の振り幅を大きくして、相手が望む水準に合わせてやるか、或いはどうしても譲れないのなら自分で相手の部分を補っていくか。低い水準でも平気なようにしておけば、よほどのことが無い限り諍いは起きないはず。貴方のゴミなんだからあなたが片付けて、なんて意地を張っていたらいつまでたっても解決しないのは目に見えています。人一倍労働することになり、損な選択だともいえますが、異文化に対して拒絶も肯定もせず、許容するというのが、この留学を通して私が導き出した最善の解決法です。



韓国クラスと留学生クラスの教材。
難易度は中級～高級、中国語と英語で解説。

◆学習

私は年度に考えれば1年のこの留学期間で、大きく分けて3種類の学習環境を経験しました。1つは復旦大学の本科生のクラス。2つ目は韓国から団体でやってきた語学研修生の小人数クラス。3つ目は中国語レベルの向上を目的とした、本科生の授業に参加する留学生のためのクラス。これに神奈川大学を含めれば、国籍もレベルも違う4の環境で学んだということになります。これによって私の学習に対する考え方は大きく変わりました。

前期に参加したのは、韓国の中央大学から30名弱の団体でやってきた人達と共に学んだ、中国語能力を向上させるための授業です。このクラスでは学科側で時間割が用意され、必ず毎日2コマ以上4コマ以下の授業が入るようになっていました。私の他にはフランス人・タイ人などいても異文化交流のチャンスでした。

授業はいちばん早くて朝8時から。日本にいるころでは5時台に家を出ることもある私にとって、学校から10分も離れていないところに住んでいるというのはとても楽で、お昼休みの2時間は一度家に帰る等、比較的優雅で時間に余裕のある生活が出来、予習や復習もちゃんと行っても睡眠不足にならずに済むということに喜ぶほどでした。

しかし、やはり留学に来たからと言って全員が真面目に参加するわけではなく、何人かの不真面目な生徒は化粧のために遅刻して来たり、出席率は悪かったり、時にはテストの日さえリスニングの途中に入ってくるような学生もいました。韓国入団体で来ている上に、復旦大学はそもそも韓国人留学生の数が非常に多いので、中国語が喋れなければ何もできない、どうしよう、という状況に追い込まれないのも1つの要因だと思います。やはり周りに同じ言語を話す人がいるとそこで小さなコミュニティを作ってしまう、海外で勉強しているんだという緊迫感が薄れ、もともと不真面目



半年間一緒に学んだ韓国入学生達。
うち、積極的に交流してくれた三人。修了式の際の写真。

な傾向のある学生は気が緩んでしまうのでしょうか。勿論中には積極的に中国語でコミュニケーションを取るほかない私やフランス人の人に話しかけている人もいます。しかし、それらはクラスの席の前一列に座るような人達だけでした。しかし私にとっては、日本人もいるであろう普通の語学研修生のクラスに参加したのではなく、日本人が1人もいない状況に自分から飛び込んだ形になったので、ちょうど来たばかりのころの荒療治として、言葉が使えない環境に慣れるのはちょうど良かったです。

ここまでは私の学習環境に対する考えはあまり変わっていませんでした。神奈川大学で学んでいる時と、クラス全体の雰囲気としては対して差が無かったからです。私の考えが少しずつ変わっていったのは、その後冬休みからのことです。冬休みに半年留学だった韓国入学生たちは皆国へ帰って行きました。時間割がかつちり決められた授業に参加していると、中々クラスの他の生徒と知り合う機会はなく、1人残された形となった私は、春節も間近な街中をぶらつくようになりました。そして半年を通してリスニングは鍛えられたけれども、いまだスピーキングが会話のレベルに達していないことを実感し、勉強法を変えました。後期からは語学研修生向けのカリキュラムは無い

ということでしたから、私は少しずつ焦りながら、スピーキングを重視した勉強を重ねていきました。

そして後期、本科生の授業と、本科生の授業に参加するレベルの留学生クラスに参加しました。授業数は前期よりも減ったにも関わらず、先生の要求は高く、テキストを使用しない講義もあったために予習がしづらかったり、マレーシアや台湾出身の人達が先生の質問に即答するために中々発言することができなかったり、難易度がぐんと上がりました。このクラスでは席が後ろの方から埋まっていくこともなく、皆前の方に固まって座るようにしました。

中間・期末の試験では、本当に授業でやった問題はおろか「同じ構造の語句を5つ挙げよ」などと、自主的に関連語句などを調べてなければ解けない問題もあり、この環境に身を置いたことは私自身大きな成長のきっかけになったと思います。

私の中では一種の予習や復習をしなければまずい、と言った強迫観念が植え付けられたともいえます。留学に行く前は、100%の準備をせずとも、ある程度の単語の意味を拾っておけば平気だとか、その場で三分あれば理解できる、などと言った、周囲のレベルに合わせての力の抜き方をしていました。常に80%の力で80%の結果を狙うような学習に対する態度です。留学の中で、自分よりも遥かに語学力が優れており、そして要領よくできる人を基準としたクラスに入って80%の成績を出すには私自身の取り組みを変えるほかなかった。

◆復旦大学生の学習態度

自身の学習について長く記しましたが、学習環境について実感した最たるものは、神奈川大学で目にしてきた光景と中国の学生の学習態度の違いです。まず、席が後ろや隅から埋まるなんてことはありませんでした。日本人学生なら敬遠したいだろう1番前の列も特に残ることなく埋まって

いきます。クラス全体が後ろの方に下がりがちになることなど無く、むしろ前に集まっているようだったともいえます。

またもう1つ、学生が校内に住んでいる為、土日でも普通に学校内の教室、図書室で生徒の姿を見かけることが出来ます。自習をしに来てい

るのだそうです。宿舎の環境等理由は多々あるでしょうが、日本の受験生も自宅より塾の自習室を使用することなどを考えると、効率のよい学習を行っているのだと思います。またこれは私のように遠方から通学している学生が強く感じることで、しょうが、学内にほぼ全校生徒が住めるだけの宿舎があるということは、皆通学時間と言う無駄を省くことが出来ているということで、1日の時間に余裕が生まれ、それぞれの趣味理解を深められるのではと考えています。

更に、時間の拘束という面で考えれば、中国の大学生がアルバイトをあまりしないのは有名です。以前中国人留学生の方に聞いたら、時給制のアルバイトが少ないこと、また割に合わないことから、多くの大学生は家庭教師や補導老師のような仕事をやるほかは、大抵の人がアルバイトをしないそうです。ほとんどの大学生がアルバイトを行っている日本とは大きな違いがあると感じました。

勉強をするために大学に入ったのか何なのか、アルバイトをメインにしていまい本末転倒な日本大学生が多い中、中国人は大学に在籍している間は大学のこと全力を注げるということ、これは日本人も見習ってしかなるべきだという考えが、中国の学生を見て思い浮かびました。

◆後書

本稿では、私の実際の私生活、学習環境の説明を交えつつ、そこで生じた異文化への理解や自身の思考の改善、また最後には限定的な情報に基づいた考えではありますが、私が素晴らしいと感じた復旦大学生の様子を記しました。この考えなどはこの留学を通して染み付いたものであり、復旦大学と神奈川大学という2つだけではなく、そこに更に2種類の学生態度の情報も入ったからこそ、その点に注目したくなったのだと思います。このように留学での経験をこのような形でまとめることは、自身が精神的に得た成果を顕著にするのに非常に効率的でした。

第7回 神人祭

人間科学部
人間科学科2年

森 由香里

1 はじめに

2月5日に第7回神人祭が行われました。神人祭とはその名の通り、神奈川大学人間科学部の学祭であり、スポーツ健康コースが中心を担っています。今年度は昨年度に引き続きゼミ対抗のスポーツフェスティバルを実施しました。

今回、私は実行委員という立場で神人祭に関わらせていただきました。半ば強制的（笑）に実行委員をやることとなり、始めは自分に何が出来のたろうかと思っていましたが、今ではこの神人祭の企画運営に関わることが出来て本当に良かったと思っています。

例年、後学期末定期試験のすぐ後に実施されている神人祭ですが、今年度は体育館の補修工事の関係で1週間ほど遅れてしまいました。そのため、帰省や部活動などの理由で参加者が減ってしまうのではないかとという不安がありました。実際に、

実行委員の主要メンバーも部活動等の理由で当日参加出来なくなっていました。彼らは、昨年度も実行委員を経験していたため、当然イニシアチブをとってくれると思っていたので正直焦りました。残された私達は腹をくくり、太田先生の協力を得ながら、手探りの状況で何日も大学に通い、打ち合わせや準備をし、当日を迎えました。

2 神人祭の午前の部

当日は、やはり例年よりも参加者が少なく、午前中約90名・午後約80名での実施となりました。ゼミ対抗のため、チーム数は最多で8チーム、最少で6チームは出来ると予測していましたが、3ゼミ合同のチームを含む5つのチームによる対抗戦となりました。

しかし…人数など関係ありませんでした！
第一種目のバレーボールが始まるととても盛り

上がり、スポーツ健康コースらしいレベルの高い白熱した戦いとなりました。それぞれのゼミが作戦をたてたり熱を入れて練習したりと、会場が一気に熱くなりました。

二種目めの大縄跳びでは一斉跳びと八の字跳びを各1分30秒を2回セット、計6分間行つたため流石に疲労困憊の様子でしたが、皆で声を掛け合



白熱！バレーボール



まさかの大ジャンプ、大縄跳び